

表紙で紹介したのは昨年（2017年）のスタンプショウはかた1リーフ展に当支部会員である隈本明氏が義兄の遺品整理の際に奇跡の発見した齋藤茂吉差出の手紙である。

手紙の内容は、齋藤茂吉が官立長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）時代の教え子北村庸人氏（隈本明氏の義父）に消息を尋ねたもの。

手紙の一部の判読できなかつたことから、山形県にある齋藤茂吉記念館に解説を依頼したところ、次ページのように回答をいただいたとのこと。

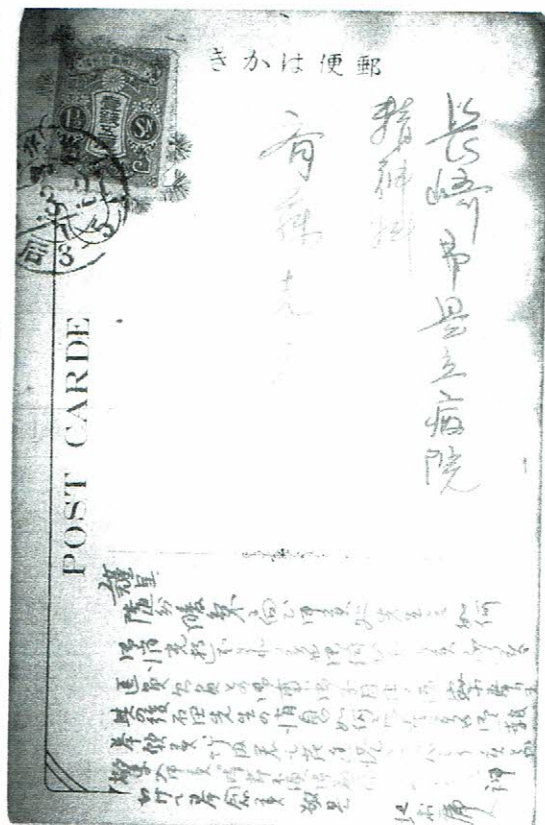
さらに、後日、同記念館から、記念館に北村氏が齋藤茂吉に返信したはがきがあることが判明し、その写し（右図）をいただいた。

往信と返信双方が揃い、信憑性も増すとともに、希少性が上がることとなった。

まさに100年振りの奇跡的邂逅である。

なお、現物の手紙は齋藤茂吉記念館に寄贈され同館にて所蔵されている。

（文責 矢羽田）



齋藤茂吉記念館所蔵の返信葉書

齋藤 茂吉（さいとう もきち、1882年（明治15年）5月14日 - 1953年（昭和28年）2月25日）は、日本の歌人、精神科医。伊藤左千夫門下であり、大正から昭和前期にかけてのアララギの中心人物。

1917年（大正6年）：1月、医科大学助手、付属病院、巢鴨病院をすべて辞職。官立長崎医学専門学校（現在の長崎大学医学部）精神科第2代教授として着任している。
（ウキペディアより）

公益財団法人 齋藤茂吉記念館

〒999-3101 山形県上山市北町字弁天1421 023-672-7227

あゝこの情のさしはさす
 のほろおのり夢をさすも、石田教授
 の情のほろおのりも、いかにあるし
 や心を痛め居り候、竹内君もかはりなき
 由、又長崎よりもしのぎ易いくらるとの
 事ゆゑ小生もよろこび居り候、小生も
 無事なれども、何も仕事せず、碌々として
 消日罷居候、御地もいろいろ騒動など

原文

あり物騒には候はずや 又 一〇八度とは驚
 き入り候、きのふの大暴風雨去来の当地は
 ややすずしく相成申候
 御健（「祥」または「筆」）いのる 拜具
 八月十七日 齋藤茂吉

拜啓 その後御無沙汰仕り候

御清栄の事 慶賀仕り候、石田教授

その後の消息 何ともきかず いかがりし

や 心を痛め居り候、竹内君もかはりなき

由、又長崎よりもしのぎ易いくらるとの

事ゆゑ小生もよろこび居り候、小生も

無事なれども、何も仕事せず、碌々として

消日罷居候、御地もいろいろ騒動など

※消日罷居候……「碌々」は平凡で役に立たないの意味ですから、碌々

として「日を消し（日々を消化し）罷り（長崎に）過（し）おります。」謙遜表現
 でしょう。

あり物騒には候はずや 又 一〇八度とは驚

き入り候、きのふの大暴風雨去来の当地は

ややすずしく相成申候

御健（「祥」または「筆」）いのる 拜具

※御健祥……「御健勝」の誤記か。

※御健筆……茂吉がその文章力または作歌を認めていてこの表現となったか。

八月十七日 齋藤茂吉

北村 学生 侍史